

TOP MUSEUM

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Yebisu Garden Place, 1-13-3 Mita Meguro-ku Tokyo 153-0062
TEL 03-3280-0099 FAX 03-3280-0033
www.topmuseum.jp

TOP コレクション たのしむ、まなぶ 夢のかけら

TOP Collection: Learning The Fragments of Dream

2018年8月11日(土・祝) - 11月4日(日)

最初から決まった答えなんかない、だから写真は楽しい。



ジャック・アンリ・ラルティエグ 《デスピオ、アンダイ》 1927年 ゼラチン・シルバー・プリント

展覧会概要

TOP コレクションは、毎年1つの共通テーマで、東京都写真美術館のコレクションを紹介する展覧会シリーズです。今年は「たのしむ、まなぶ」をテーマに、34,000点を超える当館のコレクションの中から、鑑賞者の好奇心をかきたて、遊び心をふくらませる魅力的な作品を紹介します。

TOP コレクション第2期は、「作品」という名の夢のかけらを手がかりに、新鮮な驚きのある作品体験へと皆様を誘います。この展覧会は、子供から大人まで、見たものや感じたことを自由に語りあって、作品の見方を深めていくことを目指しています。作品から読み取り、感じ取ることのできる数々の夢や想い、そして過去の記憶。想像力を働かせ、感覚をクリアにして、さまざまなイメージを体感してみてください。この展覧会では、美術作品の鑑賞アプローチとして近年注目される、対話鑑賞の方法を活用して、教育普及担当者の視点から作品選定と展覧会構成を行いました。知識や経験にとらわれず、柔軟な視点でコレクション作品を捉え直すことを意図した展覧会です。

自由に、感じるままに――

この展覧会はそんな気分を大切にしています。たとえば第一室の展示は、フランスの写真家ジャック・アンリ・ラルティエグによる「ジャンプ写真」から始まります。夏の海辺で男の人がビーチボールめがけて一心に飛んでいます。ラルティエグは高齢になるまでプロの写真家ではありませんでした。幼い頃から、こうした遊び心にあふれた日常光景をたくさん撮影しています。この作品からは、彼が感じたその時の楽しさが、ダイレクトに伝わってくるはずですが、こんな写真を撮ったラルティエグは、きっと子供の心を持ち続けた大人だったのではないのでしょうか。

本展覧会は「大人+子供×アソビ」、「なにかをみている」、「人と人をつなぐ」、「わからないことの楽しさ」「時間を分割する、積み重ねる」、「ものがたる」、「シンプル・イズ・ビューティフル」、「時間の円環」という8つのセクションにわけて、当館の約34,000点以上のコレクションの中から選りすぐった古今東西の名品をご紹介します。

展示構成

大人+子供×アソビ



植田 正治 《パパとママと子どもたち》
《綴り方・私の家族》より 1949年
ゼラチン・シルバー・プリント

なにかをみている



ロベール・ドアノー 〈ヴィトリーヌ、ガレリア・ロミ、パリ〉より
1948年 ゼラチン・シルバー・プリント
© Atelier Robert Doisneau/Contact

人と人をつなぐ

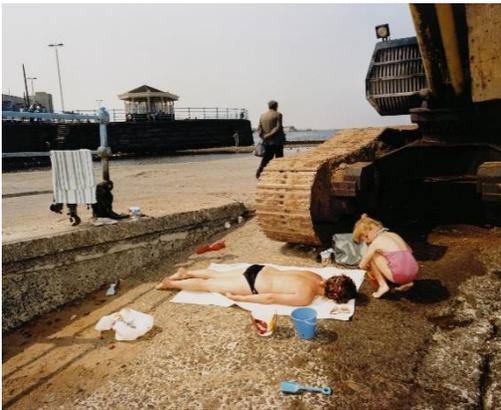


ロベール・ドアノー 《パリ市庁舎前のキス》1950年
ゼラチン・シルバー・プリント
© Atelier Robert Doisneau/Contact



山田 實 《手をつないで 糸満漁港》1960年
ゼラチン・シルバー・プリント

わからないことの楽しさ



マーティン・パー 《ニュー・ブライトン》
〈Home and Abroad〉より 発色現像方式印画

時間を分割する、積み重ねる



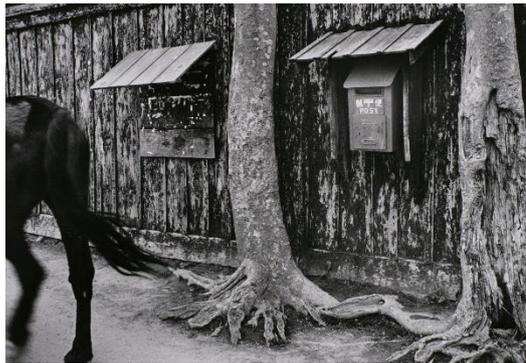
ハロルド・ユージン・エジャートン 《ミルクの中に落としたクランベリージュース》
1960年 ダイ・トランスファー・プリント
© 2010 MIT. Courtesy of MIT Museum

ものがたる



瑛九 《家・窓・人》〈フォトデッサン〉より 1950年
ゼラチン・シルバー・プリント

シンプル・イズ・ビューティフル



木村 伊兵衛 《秋田市追分・板塀》
1953年 ゼラチン・シルバー・プリント



濱谷 浩 《田植女》
〈裏日本〉より 1955年
ゼラチン・シルバー・プリント

時間の円環



宮崎 学 《冬・ニホンジカ 1993年2月10日》
〈死〉より 1993年 銀色素漂白方式印画

出品点数

計 148 点 (写真作品 147 点、映像作品 1 点)

出品作家 計 50 アーティスト

ジャック・アンリ・ラルティエグ、マーティン・ムンカッチ、名取洋之助、土門拳、植田正治、林ナツミ、ジュリア・マーガレット・キャメロン、井上孝治、長野重一、牛腸茂雄、桑原甲子雄、蔵真墨、アンリ・カルティエ＝ブレッソン、ロバート・フランク、ジョセフ・クーデルカ、レイ・K.メッツカー、ロベール・ド・アノー、山田實、荒木経惟、本城直季、渡辺義雄、ニコラス・ニクソン、ナダール、エリオット・アーウィット、ウィリアム・H.マムラー、W.ユージン・スミス、井手傳次郎、ギャラリー・ウィノグラッド、マーティン・パー、中山岩太、岩合徳光、フェリーチェ・ベアト、ダイアン・アーバス、瑛九、恩地孝四郎、竹村嘉夫、坂本万七、入江泰吉、今道子、岩宮武二、篠山紀信、ハロルド・ユージン・エジャートン、石田尚志、濱谷浩、木村伊兵衛、川内倫子、川田喜久治、宮崎学、山崎博、緑川洋一 (順不同)

東京都写真美術館の写真コレクションについて

当館では、「写真作品（オリジナル・プリント）を中心に、写真文化を理解する上で必要なものを、幅広く収集する」ことを基本方針に、1989(平成元)年より作品の収集をおこなっています。写真史において重要な国内外の作家・作品を幅広く、体系的に収集するとともに、日本の代表的作家も重点的に収集しています。写真通史を網羅する膨大な当館コレクションは、世界の美術館でも数多く展示されています。

関連事業

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第2・第4金曜日 16:00 より担当学芸員によるギャラリートークを行います。本展チケット（当日消印）をご持参のうえ、3階展示室入口にお集まりください。



「イントゥ・ザ・ピクチャーズ」展
手話つきギャラリートーク（参考図版）

手話通訳つきギャラリートーク

2018年9月14日(金)、10月12日(金)の16:00～
第1金曜日は上記「担当学芸員によるギャラリートーク」を手話通訳つきで行います。

じっくり見たり、つくったりしよう！

2018年10月28日(土) 10:30～13:00

写真にまつわる制作を体験したり、展示室で作品について楽しく話し合ったり、一度にさまざまな体験ができるプログラムです。

* 作品解説ではありません。



H29年度「TOP コレクション 平成をスクロールする 秋期 シンクロシティ」展
じっくり見たり、つくったりしよう！
(参考図版)

対象：小学生とその保護者（2人1組）／ 定員：10組（事前申込制、先着順）
参加費：800円（別途本展観覧チケットが必要です）

視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

2018年9月2日(日)／10月14日(日) 各日 10:30～13:00

障害の有無にかかわらず、多様な背景を持つ人が集まり、言葉を交わしながら一緒に美術を鑑賞するワークショップです。

対象：どなたでもご参加いただけます。 定員：各日7名 事前申込制
参加費：500円（別途本展観覧チケットが必要です）

クロマキーランド

2018年9月22日(土) 14:00～17:00

「クロマキー合成」によって、実際にそこにはない、ユニークな記念写真を撮影します（予約不要）。

対象：どなたでもご参加いただけます。 参加費：無料

対話型作品鑑賞会

2018年9月27日(木)／10月25日(木) 18:30～

参加者で対話を交えながら作品を鑑賞します。*作品解説ではありません。

本展チケット（当日消印）をご持参のうえ、3階展示室入口にお集まりください。

「たのしむ、もらう」TOPスタンプラリー

本展、「TOPコレクション 夢のかけら」展（8月1日～11月4日開催）、映像展「マジック・ランタン 光と影の映像史」展（8月14日～10月14日開催）の3展をご覧いただくと、もれなくオリジナルグッズがもらえるスタンプラリーを開催します。

お得にたのしむ、サマーナイトミュージアム

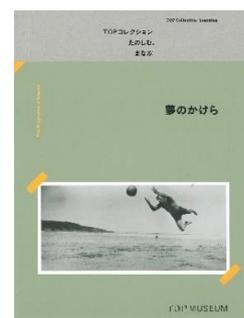
2018年8月16日(木)から8月31日(金)までの木・金曜日はサマーナイトミュージアムを実施、21時まで開館します。※入館は閉館の30分前まで

また、サマーナイトミュージアムは夏の夜を涼しく、お得に展覧会をご覧いただけます。

学生・中学生無料／一般・65歳以上は団体料金 ※各種割引との併用はできません

展覧会図録 『TOPコレクション たのしむ、まなぶ』

本展および前回「イントゥ・ザ・ピクチャーズ」展の2期を含むTOPコレクション展より、代表的な出品作品を掲載（「イントゥ・ザ・ピクチャーズ」展より64点、「夢のかけら」展より65点）。ミュージアムショップで発売中。



テキスト 佐伯胖（さえきゆたか 田園調布学園大学大学院教授、東京大学・青山学院大学 名誉教授）
武内厚子（当館学芸員）、石田哲朗（当館学芸員）
編集・発行 東京都写真美術館 1,620 円（税込）

開催概要

主催 東京都 東京都写真美術館

協賛 凸版印刷株式会社

会場 東京都写真美術館 3階展示室

東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tel 03-3280-0099 URL <http://topmuseum.jp>

開館時間 10:00～18:00（木・金は 20:00 まで）

ただし、8月16日(木)、17日(金)、23日(木)、24(金)、30日(木)、31日(金)は
サマーナイトミュージアム期間中のため 21:00 まで開館 ※入館は閉館 30 分前まで

休館日 毎週月曜日 ただし、毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は開館し、翌平日休館）

観覧料 一般 500 (400) 円／学生 400 (320) 円／中高生・65 歳以上 250 (200) 円

※（ ）は 20 名以上団体、小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害手帳をお持ちの方とその介護者は無料、第 3 水曜日は 65 歳以上無料

※8月16日(木)から8月31日(金)18:00～21:00 はサマーナイトミュージアム割引
学生・中学生無料／一般・65 歳以上は団体料金(各種割引の併用はできません)

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。掲載点数が 1 点の場合は、展覧会メインイメージとして、本リリース表紙にあります、

ジャック・アンリ・ラルティエグ 《デスピオ、アンダイ》 1927 年 ゼラチン・シルバー・プリント

のご掲載をお薦めいたします。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
また、図版のトリミングや文字掛け等の加工はできません。

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 <http://topmuseum.jp>

展覧会担当 石田哲朗 t.ishida@topmuseum.jp

広報担当 久代明子 平澤綾乃 前原貴子 press-info@topmuseum.jp

大人＋子供×アソビ

夏の海辺で、ビーチボールめがけて、体ごとダイブ！

これを写したラルティエグは子供の時から、自分の人生の中の楽しい思い出を写真にしてきました。

かれはきっと、ずっと年をとるまで子供の心を持ち続けた人だったのではないのでしょうか。

大人でも、子供でも、夢中になって遊んでいる時は、同じように楽しそうです。

ここでは、遊びの中から生まれてくるイメージを集めました。写真には生命力があふれ、軽快なリズム感や幸せな心が伝わってくるようです。

ある夏の日、ほんのわずかの間、地球の重力から自由になれたような気がした、あの時。

海辺でジャンプした人は、はたしてこの後、ボールをキャッチできたのでしょうか？

なにかをみている

写真の中の人物たちは、何を見て、何を感じているのでしょうか。視線の先には何があるでしょう？

写真に言葉がなくても、写真に写る人たちの目は、その人の気持ちを物語っているようです。

人物たちのささやきに耳をすませて、人々のドラマを想像してみてください。

はるか昔の人物と出会い、その目を見つめる不思議な感覚も味わえるかもしれません。

写真はまるで時間を飛び越えることができるタイムマシーンです。

人と人をつなぐ

親子、兄弟、姉妹、恋人、友だち、仲間、知り合い、ただの通りすがりの人。人はいつもだれかと関わって生きています。

ここでは人と人とのつながりが感じられるイメージを集めました。

どこかで、だれかが、集まって何かをしています。人生の記念になる写真をとろうとして、カメラの前に並んで立つ人たちがいます。カメラの前で愛し合っている人たちもいます。はるか遠くに行ってしまった、愛する人と再び出会える魔法をかつて信じた人たちがいました。

写真家はたまたま出会った人たちのすがたに心をひかれてシャッターを切ります。写真家はだれかのことをより深く知ろうとして、その人の仕事ぶりに寄りそい、じっと見つめます。

写真は人と人をつなぐ道具でもあります。時空を超えて、あなたも写真の中の人たちと、心が通じるかもしれません。

わからないことの楽しさ

まなぶことで、今までわからなかったことがハッキリするのは、とても楽しいことです。でも、まなぶことによって、時にはかえって、わからなくなったり、気づかなくなることがあります。実際、どれだけ調べても、自分が感じた疑問の答えが書物からは得られないことも多くあります。…

このイメージはどことなく不思議だ…その違和感はどこから来るのだろうか…？

写真の中の、写っていない部分は、どうなっているのか…？

この場面は、一体なぜ、こういう状況になっているのか…？

写真にとられた時、この人（生き物）はどんな気持ちでいたのか…？

作品を見る楽しさは、想像する楽しさでもあります。すべての疑問の答えがハッキリわかってしまうと、逆につまらないのかもしれないね。

時間を分割する、積み重ねる

芸術や写真の作品では、「もの」に生命を与えることができます。

そこでは、紙や木や土や石、植物やさまざまな素材が、まるで命が宿ったように、それぞれの言葉を語りかけてきます。また小さな世界の中に、見知らぬ宇宙の広がりを見つけたりすることもできるでしょう。

想像を広げて、「もの」が語る言葉を感じとってみてください。

作家たちは、「もの」を組み合わせたたり、フレームによって切り取ったり、光と影の効果を用いて、あるときは対象物を深く見つめることによって、表面的な現実を超えた見知らぬイメージ、いままで気がつかなかった「もの」のかくれた美しさを発見します。

ここには、生きている人間の姿は出てきませんが、人の息づかいや生命の豊かさを感じることができるでしょう。

ものがたる

アメリカの電気工学者・エジャートンは、「高速ストロボ装置」を使って、誰もみたことがなかった100万分の1秒以下の世界を写真にとらえました。

ミルクの海にひとしずくの液体をたらしたら、どんな波紋が生まれるだろう？

スポーツする人の体は、どんな風に動いているのだろう？

時間を細かく分割することで、未知のイメージが生まれました。

石田尚志は「ドローイング・アニメーション」という手法で映像を制作します。

作家は海をイメージして、絵具でかべや床に少しずつ線を描きながら、それをコマ撮りで撮影しています。たくさんのコマの連続からできている映画フィルムの性質を用いて、時間を積み重ねていき、ひとつの映像世界が生まれました。

シンプル・イズ・ビューティフル

シンプルな作品表現が見る者に強い印象を与えることがあります。ここでは、シンプルな表現のもつ美しさをとりあげます。

「シンプル」というのは、あいまいな言葉で、それ自体いろいろな意味の広がりがあります。単純、ムダがない、純粹。あるいは、かぎられた事物や出来事によって画面ができあがっている・・・などなど。いわゆる「名作」とよばれるものの中には、こうした「シンプルさ」の魅力が感じられる作品がいくつかあります。たくさんの言葉よりも、たった一言にハッとさせられるような瞬間。印象的な作品との出会いは、そんな体験にも似ていませんか。

時間の円環

星々は私たちの頭の上をまわりつづけています。生命あるものはやがて死をむかえ、その体は自然へとかえっていきます。

人や銀河や生き物たちは呼吸しながら、大きな自然のサイクルの中で、まわりつづけているのです。星の運行や動物の死をテーマとしたこれらの作品は、私たちが気づかない時の流れを感じさせてくれます。

はるか昔の人たちが空を見上げて、星座の物語を考え、そこに未来のヒントを読み解こうとしたように、今私たちは宇宙にどんな夢を思い描くのでしょうか。

ジャック・アンリ・ラルティエグ (1894-1986)

父親から手ほどきを受け、幼少期より身近な光景を写真に撮り始める。1915年、パリの美術学校に入学して絵画を学ぶ。以後、絵画や雑誌のイラストレーションなどの仕事をした。62年、アメリカに滞在がきっかけで、作品がニューヨーク近代美術館のキュレーター、ジョン・シャーカフスキーの目に留まり、翌年、同館で個展を開催するとともに、『LIFE』で特集記事が組まれた。

Jacques-Henri Lartigue (1894-1986)

After receiving lessons from his father, Lartigue began taking pictures of everyday scenes as a child. In 1915, he enrolled in a Paris art school to study painting. He later worked as a painter and magazine illustrator. In 1962, during a stay in the U.S., Lartigue's work attracted the attention of Museum of Modern Art curator John Szarkowski. The following year the museum held a solo exhibition of Lartigue's work and he was also the subject of a *Life* magazine feature.

林 ナツミ (1982-)

2011年から様々な場所で空中に浮遊する自分自身を記録したセルフポートレート〈本日の浮遊〉をwebサイトで発表、12年に同名の写真集を刊行。13年からは、写真家ユニット「原久路 and 林ナツミ」として、大分県別府市を拠点に活動している。

Hayashi Natsumi (b. 1982)

In 2011, Hayashi began publishing a series of self-portraits called "Today's Levitation," depicting the artist floating in the air in myriad places, on her website. The following year she published an eponymous photo book. Since 2013, she has also been active as part of the duo, Hara Hisaji and Hayashi Natsumi, which is based in Beppu, Oita Prefecture.

19世紀パリの有名な肖像写真家ナダール(1820-1910)は、遣欧使節団としてパリに滞在していたサムライたちの写真を多数撮影した。開国するかどうかの外交問題でゆれる幕末の日本人にとって、この旅は未知の西洋文明との衝撃的な出会いの体験であり、一方のヨーロッパ人にとってはチョンマゲ、着物、帯刀のサムライたちは奇異の対象となった。画面中央の少年ポールはナダール自身の息子である。

The famous Paris-based portrait photographer Nadar (1820-1910) took numerous pictures of samurai when they visited the French capital as part of a Japanese embassy to Europe. At the end of the Edo Period (1603-1868), a great deal of attention was focused on the diplomatic problem of whether or not to open Japan – the country had been closed for many years – to the outside world. This trip to Europe proved to be an eye-opening experience for the Japanese officials, who were largely unaware of Western civilization. At the same time, men wearing topknots, kimono, and swords were a curious sight for Europeans. The young boy in the center of the picture was Nadar's son, Paul.

ウィリアム・H.マムラー(1832-1884)

ニューヨーク、ボストンで活動した最初の「心霊写真家」とされる。1860年代以降、亡くなった家族や恋人の「霊」とともに依頼主の肖像を撮影するという触れ込みで、2枚の異なるネガから印画紙上に二重に露光することによって、人物肖像と「霊」が重なった画像を制作し、商業的な成功を収めた。1870年代にはメアリー・トッド・リンカーン(アメリカ合衆国大統領エイブラハム・リンカーン未亡人)の肖像を撮影したことで知られている。

William H. Mumler (1832-1884)

Mumler, who worked in New York and Boston, is considered to be the first spirit photographer. In 1860, he declared that he had the ability to take portraits of people with the spirits of their late family members or lovers. By making a double exposure of two different negatives on photographic paper, Mumler created pictures that juxtaposed his client's portrait with a spirit. This proved to be a commercially viable approach. Mumler is also known for a circa-1870 portrait of Mary Todd Lincoln, American President Abraham Lincoln's widow, with her dead husband's "ghost."

井手傳次郎(1891-1962)

長崎県生まれ。10代半ばで上京し西洋画を学ぶ。関東大震災をきっかけに長崎へ戻り、写真術を学んだ。1926（昭和2）年に長崎市片淵町で「響（ひびき）写真館」を開業。1943（昭和18）年に閉館するまでの間の16年間、大いに繁盛した。当時の市民たちにとって、祝い事や特別な行事の時にこの写真館で撮ってもらうことがステイタスだったという。

Ide Denjiro (1891-1962)

Ide was born in Nagasaki Prefecture, and moved to Tokyo in his mid-teens to study Western painting. After the Great Kanto Earthquake of 1923, he returned to Nagasaki and began to study photography. In 1926, Ide opened the Hibiki Shashinkan, a commercial photo studio, in the city's Fuchimachi district. For the next 16 years, until the studio closed in 1943, Ide did a brisk business. For many local residents, having their picture at the studio on an auspicious occasion or for a special event, was seen as a status symbol.

ハロルド・ユージン・エジャートン(1903-1990)

ストロボ撮影のパイオニアとして知られるアメリカの電気工学者。1931年に高速ストロボ装置を開発し、〈電球を通り抜ける弾丸〉などの高速度撮影によって、誰も見たことがなかった100万分の1秒以下の現象を撮影することに成功する。第二次世界大戦後にはカラー写真による《ミルクの滴の小冠》などを手がけた。

Harold Eugene Edgerton (1903-1990)

Edgerton was an electrical engineer known for inventing electronic-flash photography. In 1931, Edgerton developed a high-speed strobe, and in high-speed photographs such as *Death of a Light Bulb*, he succeeded in capturing previously unseen phenomena that lasted less than a microsecond. He is also remembered for *Milk Drop Coronet*, a color photograph he took after World War II.

瑛九(1911-1960)

本名・杉田秀夫。10代の頃から上京して洋画を志すとともに、専門学校で写真を学んだ。1936年に画家・長谷川三郎、美術評論家・外山卯三郎とともに、自身の写真現像による作品を「フォト・デッサン」と命名、同時に作家名を「瑛九」と名乗ることを決めた。同年、フォト・デッサン作品集『眠りの理由』を刊行。フォト・デッサン、油彩画、版画と多彩な技法によって独自の芸術表現を追求した前衛画家である。

Ei-Q (1911-1960)

In his teens, Ei-Q, whose real name was Sugita Hideo, moved to Tokyo with aspirations of becoming a Western-style painter. He also studied photography at a vocational school. In 1936, along with the painter Hasegawa Saburo

and the art critic Toyama Usaburo, Ei-Q began making works that he dubbed “photo drawings,” using pictures that he developed himself. He also adopted the name Ei-Q, and published a book of photo drawings called *Reason to Sleep* the same year. Ei-Q was an avant-garde artist who created unique artistic expressions using a variety of techniques including photo drawing, oil painting and printmaking.

竹村嘉夫(1925-2013)

中学生時代に顕微鏡写真と出会う。水産試験所に勤める傍らで、ミクロの世界と水の中の生命をテーマとした作品を発表した。著作には『自然の造形』(1962年)、『魚の表情』(1969年)などの写真集がある。

Takemura Yoshio (1925-2013)

Takemura first became acquainted with photomicrography as a junior high student. While employed at a fishery research laboratory, he began making works dealing with the themes of microscopic worlds and marine life. His photo books include *Natural Creations* (1962) and *Expressions of Fish* (1969).

宮崎 学(1949-)

中学校を卒業後、仕事の傍らで野生動物の写真を撮り続け、72年よりフリーランスの写真家として活動、中央アルプスのふもとの伊那谷に住む。自然雑誌や図鑑などで写真を発表している。《死 Death in Nature》は、ロボットカメラを活用して、死んだ野生動物が土に還っていくプロセスを記録した写真シリーズである。

Miyazaki Manabu (b. 1949)

After graduating from junior high school, Miyazaki began photographing wild animals while holding down a regular job. In 1972, he began working as a freelance photographer and moved to Inadani at the foot of the Japanese Central Alps. His pictures have appeared in nature magazines and illustrated reference books. Using a robot camera, Miyazaki created the *Death in Nature* series, which documents the process in which dead animals return to dust.

山崎博 (1946-2017)

1966年、大学在学中に寺山修司の劇団「天井桟敷」に関わり、それをきっかけに当時の前衛芸術の現場を撮影。78年から79年にかけて、太陽が描く画を構想した代表作〈HELIOGRAPHY〉(写真および映画作品)を制作した。方法や条件を限定したミニマルな作風によって写真特有の偶然性と光の現象の豊かさを写し出し、現代のコンセプチュアルな写真表現の先駆者として知られる。

Yamazaki Hiroshi (1946-2017)

In 1966, while enrolled in university, Yamazaki came into contact with Terayama Shuji's Tenjo Sajiki theatre troupe. This inspired him to take pictures of the era's avant-garde art. From 1978 to 1979, Yamazaki produced his most important work *Heliography* (including both photographs and films), which focuses on pictures created by the sun. With a minimal style, limited in terms of technique and other conditions, Yamazaki is seen as a pioneering figure in contemporary conceptual photography. His works depict the inherently random nature of the medium and the rich qualities of light.